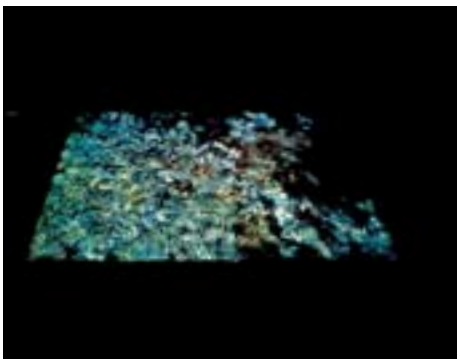
平成13年度 卒業・修了制作展

美術学部卒業生と大学院美術研究科の修士課程・博士課程を修了する学生が、日々の研鑽と努力を「かたち」に表す卒業・修了制作展。その中から選ばれた、9点の買い上げ作品を紹介する。



ながやあきこ
永冶晃子
油画 学部
所在について
H230×W230cm
石、感光乳剤、映像

かわせよしひと
川瀬伊人 日本画 修士
bus stop
H188×W227cm　紙本彩色

たなかしんこう
田中信光
鍛金 修士
Rain Vase
H180×W110×D110cm
銅　鍛金

むらおりな
村尾里奈
彫刻 修士
昨日の箱庭
H70×W240×D300cm
鉄、ペイント

〝アピールの場〟としての卒業・修了制作展

高橋理子

学部から修士までの六年間の結果。その発表の場が卒業・修了制作展であると考えていた一年前。しかし、本当に今までやってきたことの成果を出せればそれでいいのだろうか。私はこれから社会へ出て行こうというのに。そう考え始めたのは、就職活動真っ只中の梅雨の時期でした。

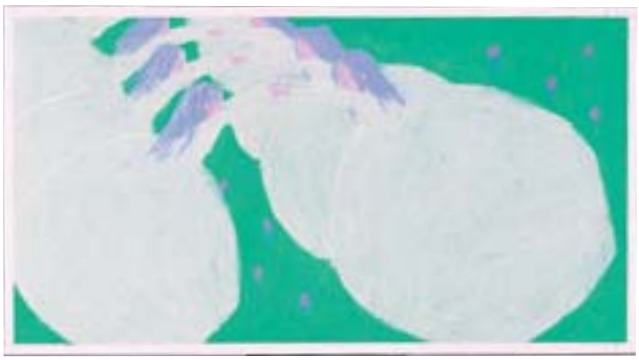
面識のない人に対して自分をアピールする。私はこんな人間で、こんなことをやってきましたと……。そのような就職活動に向けての自己分析をする上で、これまでの作品では、私が考えていたことを表現しきれていないと感じていました。だからこそ、修了制作展という大きなイベントをフルに利用して、自分が一番やりたいことを多くの人にアピールしようと考えました。

幼少の頃からファッションの世界に興味を持ち、これまでの人生は、その世界に身を置くための土台作りであったように思います。しかし、この大学で着物に出会ったことは、私のファッションに対する考えを一掃してしまうほどでした。そして、高校時代から服作りを勉強してきた私が着物に対して感じたことこそ、自身を驚かせたのでした。それは、着物（和服）も洋服も同じ着るものであるという考え方でした。着物を知れば知るほど、私にとっての着物の存在は、洋服に近づいて行きました。しかし、今の日本において着物の存在は非常に寂しいものです。現代に生きる日本人として、自国の民族衣装を特別な物と考えるのではなく、洋服と同じ〝着るもの〟として捉えられるような着物を作りたい。このような気持ちから生まれた今回の作品では、洋服の柄として印象の強いドット柄を用いて、着物の持っているフォーマルで清楚なイメージを払拭するようなデザ

むらたともやす
村田朋泰 デザイン 修士

あか　みち
朱の路
H720×H480ピクセル
立体アニメーション、DVテープ

たかはしひろこ
高橋理子 染色 修士
着るもの 12345…
H182×W136cm…5点
絹(縮緬)、酸性染料、型染



あまもとけいこ
天本恵子 デザイン 修士

ヤギと赤い月
H25×W25cm
ワトソン紙、クレパス、印刷

ばんどうこうすけ
坂東幸輔
inter-view
立体:H38×W600×D300cm
平面:H84.1×W118.9cm
…12枚
木、金属、コンクリート、石膏

せきねよしえ
関根理恵
保存修復・工芸 修士
日光山輪王寺所蔵「刺繍不動明王二童子像掛幅」現状推定復元模造
H131.4×W39cm
平絹、絹糸(釜糸、撚糸、杢糸)、染料、墨、刺繍、掛幅装

インとし、着用した状態を映像という形で明確に見せることによって、モダンでポップな印象を与えられるよう目指しました。また、小物の色合わせや時代衣装的な着付けにより、着物も洋服のように自由にコーディネイトできるということを伝えたいと考えました。見せ方に重点を置いたことで、着物に縁遠い若者から、普段に着物をお召しになっている方や洋服に関わるお仕事をなさっている方まで、多くの方から反響を得ることができ、卒業修了制作展を多いに活用できたと感じています。そして、入学当初から私の思いをご理解いただき、自由な作品作りに力をお貸し下さった工芸科の先生方が、工芸科では珍しい映像という作品形態でありながら、大学美術館買い上げ作品として選んでくださったことは、非常に嬉しく、大きな達成感につながりました。これまで支えてくださった皆様に、感謝の気持ちを伝えるために、今後もより一層の努力をして行きたいと思います。本当にありがとうございました。

（たかはし・ひろこ／平成十三年度大学院美術研究科修了生）

「平成13年度　卒業・修了制作展」は2002年2月21日～26日まで、東京都美術館（右）、東京芸術大学大学美術館（左）ほかで開催された。
（撮影：山口俊治）